

きたがる



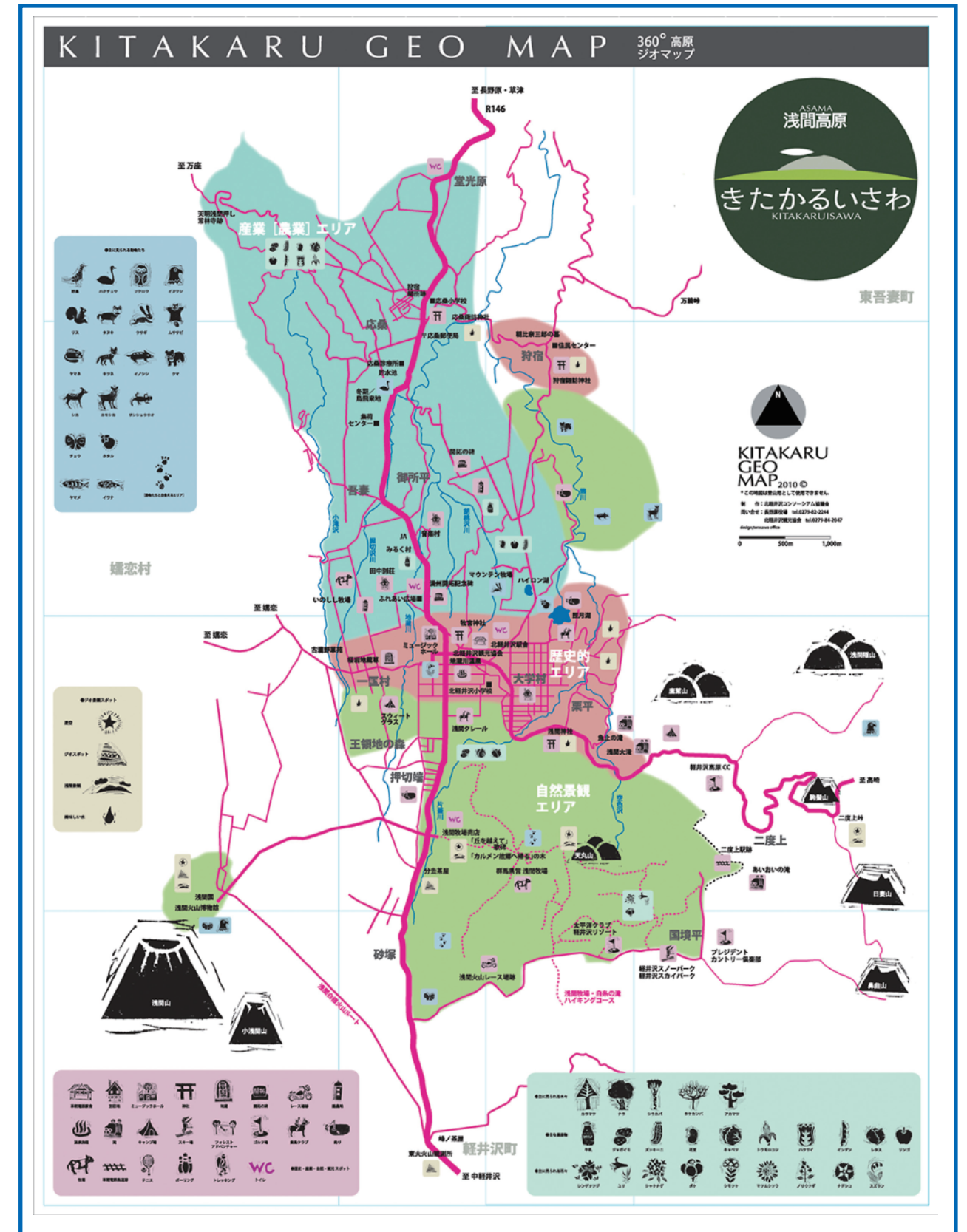
ホームページとリンクした北軽井沢フリーマガジン
(じねんびと) <http://jinenbito.jp>

きたがる

群馬県・北軽井沢発 ホームページ<http://jinenbito.jp>とリンクしたフリーマガジン

発行：北軽井沢じねんびと
企画・編集・制作：北軽井沢じねんびと

Take Free



発行：北軽井沢じねんびと
企画・編集・製作：北軽井沢じねんびと

●本誌の内容は、下記ホームページ『じねんびと』とリンクしています。より詳しい内容や最新の情報を掲載しています。ぜひ、一度訪れてみてください。
[ホームページURL] <http://jinenbito.jp/>

●本誌についてのご意見・ご感想・ご質問などお待ちしております。
左記ホームページか、下記のあてにお寄せください。

北軽井沢じねんびと事務局
[メールアドレス] info@jinenbito.jp

はじまりは いつも 北軽……～

浅間高原一帯が、六里ヶ原と呼ばれていた時代、北軽井沢に人の生活はありませんでした。文豪、田山花袋が「浅間の麓なる六里の焼原」と書き記したとおり、まさに一面焼け野原だったのです。活火山、浅間山の支配する様は誰の目にも明らかでした。やがて、浅間牧場ができ、草軽電鉄が開通し、一匡邑、法政大学村ができ、発展が始まりました。第二次世界大戦の時は、多くの著名人が疎開し暮らしました。『浅間の焼原』は、戦後の入植者たちの開拓によって、県内有数の農・酪農地帯に生まれ変わりました。日本で初めての「カラー映画」、国内初の本格的「2輪自動車レース」、「音楽学生のための夏期合宿施設」などの発祥の地が、この北軽井沢です。天然スケート場、高原バンガロー村、ペンション群など多くのブームが過ぎ去りました。それでも、優美な浅間山、涼やかな気候、そして蒼天と大地が、この地の未来を指し示しています。

目次

- すべてはここから始まった浅間牧場秘話 4・5
- 北軽井沢の街を興した草津軽便鉄道(草軽電気鉄道)..... 6・7
- 「邑」・「村」避暑地開発の歴史ものがたり..... 8・9
- 浅間の焼原を県内有数の農・酪農地帯に開墾..... 10・11
- 五感を澄ませて楽しもう北軽井沢散策マップ..... 12・13
- 火の山「浅間」大地の恵みに生きる 14・15
- 北軽井沢が燃えた2輪耐久「浅間高原」レース 16・17
- 山の音楽堂「北軽井沢ミュージックホール」 18・19
- 北軽井沢で考える「農」「食」「住」の未来 20・21
- 春夏秋冬の北軽井沢 アクセス&周辺マップ 22・23

未来へと続く邑 零地点

北軽井沢の街を興した

草津輕便鐵道（草輕電氣鐵道）

北輕井沢の發展を支えた理由の一つが、草
軽電鉄の開通。輕井沢から北輕井沢、とし
て草津温泉をつなぐリゾートの幹線が誕
生した。

スイスの登山鉄道を模して、新軽井沢から草津温泉間を結んだ草津軽便鉄道が誕生したのは、一九一五年（大正四年）です。その目的は、草津温泉をはじめ

沿線の旅客輸送とともに、物資及び木材、薪炭、硫黄などの貨物を輸送し、地域の発展に努めることをあげていました。

開業時は、新軽井沢く小瀬（

後の小瀬温泉)まででしたが、順次草津まで路線を延長し、蒸気機関車から電気機関車へと切り替え、一九二六年(大正

旧草軽電鉄の歴史を語る「北軽井沢」駅舎

一九一八年（大正七年）は「地蔵川停車場」といわれていましたが、一九二八年（昭和三年）地蔵川地区内に、法政大学村が開村されたことに伴い、昭和四〇五年に駅舎が新築され、駅名を軽井沢の北側に位置していた「北軽井沢」駅と改めました。新軽井沢草津間で最も乗降客が多い、にぎやかな駅でした。この駅舎は、和風意匠の木造平屋建て、入母屋造り、外真壁造りの白漆喰塗り土州の善光寺をモデルにしたと言われている屋根と、細かい形状の洋風窓を組み合わせた洋折衷形式の斬新なデザインで、正面玄関の欄間（らんかん）は、駅舎を寄贈した法政大イニシャル「H」の文字がデザインされ、白く並んでいます。

され、白く並んでいます。

国の有形
文化財に登録



「カブトムシ」復活!!



懐かしい旧草軽電鉄の電気機関車「デキ12形」の実物大モニュメント(木製模型)が2010年(平成22年)7月北軽井沢駅舎に登場しました。

この電気機関車は、パンタグラフが高く、カブトムシが角を突きだしているように見えることから、「カブトムシ」の愛称で、草軽電鉄の当時の利用者だけでなく、鉄道ファンにも広く親しまれた電気機関車です。もともとは米国のジェフリー社が鉱山用に製造した車両でしたが、その後改良を加え、草軽電鉄の代名詞となりました。「北軽井沢のシンボルに」と、産・学・官から成る「北軽井沢コンソーシアム協議会」が、企画立案し、木製オブジェとして製作しました（設計・施工：有限会社光建築工房）。

浅間高原を駆け抜けた電気機関車



万人という乗客を記録しましたが、相次ぐ台風の被害や急速な自動車輸送の発展により、草軽電鉄は一九六二年（昭和三七年）に廃線となりました。

次々に線路や駅舎が姿を消していくなか、当時の姿を現在までとどめた唯一の遺産が「北軽井沢」駅舎です。



二〇〇六年(平成一七年)、長野原町は旧草軽電鉄や北軽井沢の歴史を後世に伝えようと、駅舎の改修工事を実施し、その保存に努めました。この「北軽井沢駅舎」はその土地を知る上で重要な建物であり、また広く親しまれているため「国土の歴史的景観に寄与しているもの」に該当すると考えられ、二〇〇七年(平成一八年)十一月二十九日、国の登録有形文化財になりました。

現在駅舎は、文化財の活用という観点から、一般に開放され、北軽井沢に関係のある様々な展示などに生かされています。

は、草軽電鉄の駅を舞台として
森繁久弥はその駅長役を演じて
います。そのほかにも、分かつて

いるだけで、十五本もの日本映画に北軽井沢や草軽電鉄が、登場しています。

旧草軽電鉄北軽井沢駅に関する資料の一部は、隣接の北軽井沢観光協会・北軽井沢ふる

さと館にも展示してありますので
あわせてご覧ください。

日本の名画に
たびたび登場

「カフトムシ」以外にも、草軽電鉄にはユニークな電車がいろいろありました。特に有名なのが一九三八年（昭和一三年）に登場した納涼客車「しらかば」号と「あさま」号。ともに、草軽名物サマーカーと呼ばれ、人気を博しました。

草軽電鉄は、日本の映画作品にも数多く登場します。日本初のオールカラー作品『カルメン故郷に帰る』（監督／木下恵介・主演／高峰秀子）は、北軽井沢駅、浅間牧場を中心に撮影された作品です。ちなみに、映画の中で主人公たちが乗った車両は、客車ではなく、当時イオウや鉱石などの輸送に使われていた、屋根のない無がい車と呼ばれた貨車でした。

草軽電気鉄道の主要駅とその沿革





大学村の道-村民の申し合わせで、ほとんどの道は舗装されていない。

この一匡邑では、夏期大学が開かれたと伝えられています。日本で最初に林間学校、臨海学校を始めたのは、東京・牛込にある成城学校で、大正六年に林間学校を始めています。この成城学校も、北軽井沢に足跡を残しています。

北軽井沢の街を 作つた法政大学村

この一匡邑の開村から数年後、北軽井沢にもうひとつの村（別荘地）が誕生します。法政大学が昭和三年に建設した「法政大学村」がそれです。大正九年、当時の法政大学

学長、松室致学長が、草津輕便鉄道株式会社から、高垣仁之助氏との共有で、長野原町応桑の二七三ヘクタールの土地を購入しました。当初は、軍事教練の場を利用していましたが、大正十五年頃この地に、大学村を創設しようと考えました。当時大学の予科長をしていた野上豊一郎氏に、応桑の私有地を避暑地として大学の教職員のために提供したいと申し入れました。

山荘建築を条件に、一口五百坪、坪一円と破格の値段で募集を開始しました。昭和三年の夏、浅間高原の一角に第一区・四十戸の山荘が誕生しました。これが、法政大学村の始まりです。それまで、当時の地蔵川駅（後の北軽井沢駅）の周辺にもほとんど人家のなかった場所に、突然の建築ブームです。大学村の山荘建築は、翌年の第二区（約四十戸）、第三区へと続いています。

また、村民の社交と憩いの場とするために、昭和四年、湯沢に大学村倶楽部を建築しました。また、昭和四年から五年の間に、草津輕便鉄道の現在の「北軽井沢」駅舎を建築、草津輕便に寄附しています。また、昭和六年には、楢

沢の溪流を堰き止めた人造湖（楢沢池）現在の照月湖）をつくりました。

こうした様々な環境整備が整うなか、大学村は「健全な、質素な、愉快な共同生活」を送るために、自治的組織として、村会制をとりました。村民の選挙によって村会議員を選び、管理・運営の仕事にあ

高原の小さな村-北軽井沢音楽村 戦争で消えた-みそぎ村



音楽村に今も残る記念碑と音楽堂の屋根にあった旗竿

音楽村は、1956年（昭和31年）、くるみヶ原新文化村（音楽の村）として、東拓興業株式会社から分譲されたもの。当時はまだ珍しかった野外音楽堂などを設け、音楽家や声楽家、音楽愛好家に呼びかけ、文化的な別荘地の建設を目指しました。当時の会員は、82名で、初代会長には東京世田谷区で「岸辺幼稚園」を経営されていた岸辺泰雄さんが選ばれました。中央のロータリーには、野外音楽堂が設けられ、音楽村会員や、東京フィルハーモニーメンバーによる演奏会なども行われました。岸辺泰雄さんは多趣味で、クラシック音楽、スキー、テニスなどのほかに、十三音会という会を主宰していました。開村当時の音楽堂は1958年の狩野川台風で倒壊、再建されましたが、1962年の大雪でふたたび倒壊し、その後は再建されませんでした。この跡地には、北軽井沢音楽村の歩みをしるした記念碑と、そばには最初の音楽堂の屋根の頂点にあった旗竿が立てられています。また、記念碑には初代会長岸辺泰雄さんの愛した次の言葉が刻まれています。『愛國心よりも愛地球心を』。現在も音楽村には、約30軒の別荘があります。このほかにも、昭和10年頃、東京都武蔵野市の謡曲グループの人々を中心となり開設した「みそぎ村」という別荘地が、一匡邑の隣りにありました。この村は、戦時中に砲術演習の弾道下にあたるという理由で強制的に撤去されました。

たらせたのです。初代の村長には松室致氏、議長には野上豊一郎氏が就任しました。

北軽井沢に生まれた邑・村という別荘文化は、利便性だけではない、自由でアカデミック、そして質素な、他の避暑地にはない独特の雰囲気を作り上げています。

「邑」・「村」

牧場ができ、鉄道が開通すると、北軽井沢地区が避暑地として脚光を浴びる時代がやってきます。一匡邑、法政大学村、音楽村と、他の避暑地とは違う、独自の文化をもつ山荘コミュニティが次々と生まれました。

現存する大正時代の 浅間北麓最古の洋館

北軽井沢の避暑地のはじまりは、大正時代にさかのぼります。最初に北軽井沢（当時は地蔵川と呼ばれていました）に、注目したのは、当時輕井沢、草津間の鉄道開通を計画していた草津興業（後の草津輕便鉄道）です。北白川宮能久親王が薨去され、広大な浅間牧場の敷地が明治四十一年に、松本隆治氏ほか四名の共有地として民間へ払い下げとなりました。このなかに草津輕



法政大学村を開発した松室致学長を記念した「北軽井沢開発之碑」

便鉄道の創立委員代表の永松達吾氏も名を連ねていました。大正六年には、草津輕便は輕井沢・吾妻間の営業を開始していました。当時の鉄道開設の目的が、沿線の旅客とともに、木材、薪炭、その他貨物輸送のためとあり、旅客、乗客の確保に力が注がれていたことが分かります。

北軽井沢で最も古い別荘は、秋元子爵（旧館林藩主）が、大正の初め御所平に建てたものといわれています。この別荘は現在移築され、応桑諏訪神社の社務所となっています。現存する浅間北麓の最古の洋館が、大正後期に建てられた「田中別荘」です。



邑の真ん中を流れる小滝川、初期の時代は炊事洗濯の場だった。

旧一高の集まりから 生まれた「一匡邑」

旧一高（帝国大学の予科・現在の東京大学教養学部などの前進となった）の同窓生らが集い、大正二年に「一匡社」（いつきようしゃ）という結

れています。労働、農民、婦人解放、護憲、普通選挙法などの運動が大きな流れとなり、大正デモクラシーと呼ばれる民衆運動をひきおこしました。この時代に、北軽井沢が避暑地として脚光を浴びたことが、独自の別荘文化（邑・村）へとつながっていきます。

社をつくり、『社会及び国家』という同人雑誌を発刊しました。雑誌の名称や結社という言葉から、堅い印象を受けるかも知れませんが、医学博士や文化人の多い団体だったようです。同人には一匡邑（むら）を開村した、大村正夫氏、細貝正邦氏などがいました。また、社友には作家の谷崎潤一郎氏もおり、雑誌への寄稿も行っていました。

きっかけは大正十一年、婦人子供たちの真夏の健康保持と静養のため別荘建築用地を探すなかで、草津電鉄から強い働きかけがあったことです。薦められ、浅間山麓を見学、気に入り、草津電鉄の土地部から、一万坪を購入しました。翌年の大正十二年夏には、大村正夫氏、細貝正邦氏ら十三名の別荘が完成し、結社の名から「一匡邑（いつきようむら）」と名づけられました。一匡邑の中には、王領地の湧水を水源とする小滝川が流れ、川沿いに十数軒の別荘が点在しています。

当時大正デモクラシーの影響が強く、別荘地の土地を共有地として扱い、一切の境界を設けない、食材は共同購入など、別荘地の住民が自主的

北軽井沢の開拓年表

昭和20年	・8月15日第2次世界大戦終結。 ・満州開拓者の引きあげが始まった。 ・群馬地区の開拓が始まった。
昭和21年	・開拓者のグループ、押原収納組合などができた。
昭和22年	・大屋原の開拓が始まった。
昭和23年	・ハイロン・甘楽地区の開拓が始まった。 ・北軽井沢開拓農協ができた。 ・大屋原の組合で乳牛を飼育し始めた。
昭和24年	・群馬地区の開拓が盛んになった。 ・キティー台風で新しく作った家が大部分壊された(大屋原)。
昭和26年	・輪作試験地を設け、作物の収支経済調査を7年計画で実施。 ・牛乳処理所をつくった。
昭和27年	・乳牛が100頭になった。
昭和28年	・4月火事で牛乳処理所や農協の設備や米が全焼した。 ・冷害で作物がほとんど取れなかった。
昭和29年	・冷害で作物がほとんど取れなかった。 ・リンゴの栽培が始まった。 ・生活の苦しさから10数戸が開拓地を去っていった。
昭和30年	・村づくり5原則を決めた。
昭和32年	・大屋原、ハイロン地区に電気がついた。
昭和33年	・開拓地の道路の整備が始まった。 ・北軽井沢農協でトラクターを1台購入した。
昭和35年	・農業の機械化実験が始まった。
昭和36年	・大屋原に水道ができた。
昭和38年	・乳牛が500頭になった。
昭和40年	・ハイロン地区がリンゴ団地の指定を受けた。
昭和50年	・乳牛が2,000頭を超えた。

高冷地に適した 村づくり5原則

「朝は星のあるうちから夜は星の明かりで、三度のめしを二度にして毎日開墾した。機械がなかったから、男たちがくわをくわ掘り起こした。女たちが土のかたまりをくわで、根やゴミをヨツゴのような金の鉤でかき出して、畑に種を蒔けるようにした。(金子宇めさんの記録から)」

こうした厳しい環境のなか、清水圭太郎さんを入植者のリーダーとして、北軽井沢の開拓は進みました。入植は昭和二十一年春から昭和二十四年までの3年が主力でした。延べ総数一九三戸、総面積約二二〇〇ヘクタール、内耕地約七〇〇ヘクタール、宅地は各戸二〇〇〜二五アールが配分されました。

麦、豆類などを作っていました。入植は昭和二十一年春から昭和二十四年までの3年が主力でした。延べ総数一九三戸、総面積約二二〇〇ヘクタール、内耕地約七〇〇ヘクタール、宅地は各戸二〇〇〜二五アールが配分されました。



大屋原にある「群馬満蒙開拓魂之碑」

群馬県内有数の 農・酪農地帯に

こうして開拓された農地は、酪農ばかりではなく、肥沃な農地として生まれ変わり、高原野菜やりんごなどが盛んにつくられるようになりました。

酪農については、群馬県内で最も生産量のある地域に成長しました。また、野菜についても、とうもろこし、レタス、白菜、キャベツなどの高原野菜などは、県内でも有数の産地として知られています。



大屋原の夏、収穫をまつキャベツ畑

- 村づくり5原則●
1. 草をつくり(草地農法)
 2. 牛をつくり(酪農)
 3. 土をつくり(地力増進)
 4. 村をつくり(庶民階和)
 5. 人をつくる(人間研成)

浅間の焼原を 県内有数の 農・酪農地帯に開墾

明治時代「焼原」と呼ばれた地が、
群馬県内有数の農・酪農地帯に
生まれ変わった。
明治に始まった開拓の歴史、
戦後の食糧増産を旗印とした入植運動が
北軽井沢の農と酪農を一変させた。

明治時代にも 旧藩士が入植開拓

北軽井沢の開拓の歴史は古く、明治十六年、旧館林藩士が、明治の改革で職を失ったために、政府が旧武士救済策のひとつとして開拓移民を行い、現在の御所平に入植したのが始まりです。



応楽地区にある吾妻牧場の碑

ことから、源頼朝の『浅間野巻狩』に由来するものでしょう。この御所平も、北白川宮の浅間牧場の一部でした。当時の館林藩旧藩主、秋元子爵が明治十六年に牧場の一部を払い下げてもらい、旧館林藩士族十二戸、六十余名が入植しました。「十年間辛抱するならば、一戸あたり五町歩の土地をやる」という約束で移住したということです。しかし、十二戸の入植者のうち、開墾、営農の苦しさに脱落、失踪者が続出して、次第に戸数が減少し、わずか二戸がとどまりました。倉田家と山下家です。二戸ではありましたが、当初予定の六九町歩をもらいうけ、御所平の部落をつくりました。また、御所平には秋元子爵の土地もあり、大正の初め頃、秋元家の別荘を建て、旧館林藩士の開拓を見守っていたようです。ちなみに、この秋元別荘は現在、応桑諏訪神社の境内に移築され、

戦後の農地改革と 満蒙引揚者の入植

第二次世界大戦以前には、浅間牧場、吾妻牧場、亀沢農場などの大規模な開拓が行われましたが、浅間山麓の開拓は、戦後の農地解放と、満州・蒙古からの引揚者の入植によって飛躍的に進みます。戦後の農地解放は、不在地主から農地を回収、自作農が増え、その地位を安定させました。北軽井沢に開拓村と呼ばれる地区は四ヶ所あります。ハイロン、大屋原、甘楽、群馬です。また、長野原町には他にもアテロ、下小菅などの開拓地区があります。

ハイロンやアテロというのは、満州での開拓地の名前をそのまま使っています。それぞれの地区の満蒙開拓前の母村は、大屋原は木瀬村、ハイロンは北橋村と南橋村、甘楽は甘楽郡、群馬は伊勢崎の名和村などといわれています。

こうした満州・蒙古からの引揚者に与えられたのは、浅間山の東北麓、やせた火山灰地の草原と、雑木林や落葉松林で、熊笹が胸まであるような場所ばかりでした。これらの人々がこの

地を選んだのは次の理由がありました。厳しい自然環境を克服するだけの経験を満州農業で得ていたこと、さらに復員後入植を希望する多くの人々を受け入れるだけの土地の広さにあつたといわれています。

入植当時の開拓村の写真を見ると、落葉松を切り倒して柱にし、熊笹を刈り取って壁と屋根にした手作りの家です。当時は開拓に使う機械がなかったため、のこぎりで木を切り倒し、根を抜きとり、熊笹を焼き払って畑をつくりました。

当時の開墾の記録を見ると、その厳しい労働に驚きます。



国道沿いにある「満州開拓記念碑」

浅間高原ウォーキングガイド

- A-滝
① 浅間大滝
② 魚止めの滝
③ 古瀧
④ 仙娥滝
⑤ 不動の滝
⑥ 槌谷の滝
⑦ あいおいの滝

- B-湧水
① 借宿湧水
② 栗平湧水

- C-池・湖
① 照月湖
② ハイロン湖
③ 応桑用水池
④ 池の塚沼

- D-川
① 熊川
② 地蔵川
③ 片蓋川
④ 小宿川
⑤ 赤川

- E-沢
① 胡桃沢
② 小滝沢
③ 小矢沢
④ 空色沢
⑤ 堀切沢
⑥ 小菅沢

- F-山
① 浅間山
② 鼻曲山
③ 天丸山
④ 鷹繁山
⑤ 浅間隠山
⑥ 菅峰
⑦ 駒髪山
⑧ 氷妻山

- G-峠
① 二度上峠
② 万騎峠
③ 栗平峠

- H-牧場
① 浅間牧場

- I-別荘地
① 北軽井沢大学村
② 一匡邑

- J-神社
① 牧宮神社
② 狩宿諏訪神社
③ 応桑諏訪神社
④ 栗平浅間神社
⑤ 小宿神明社

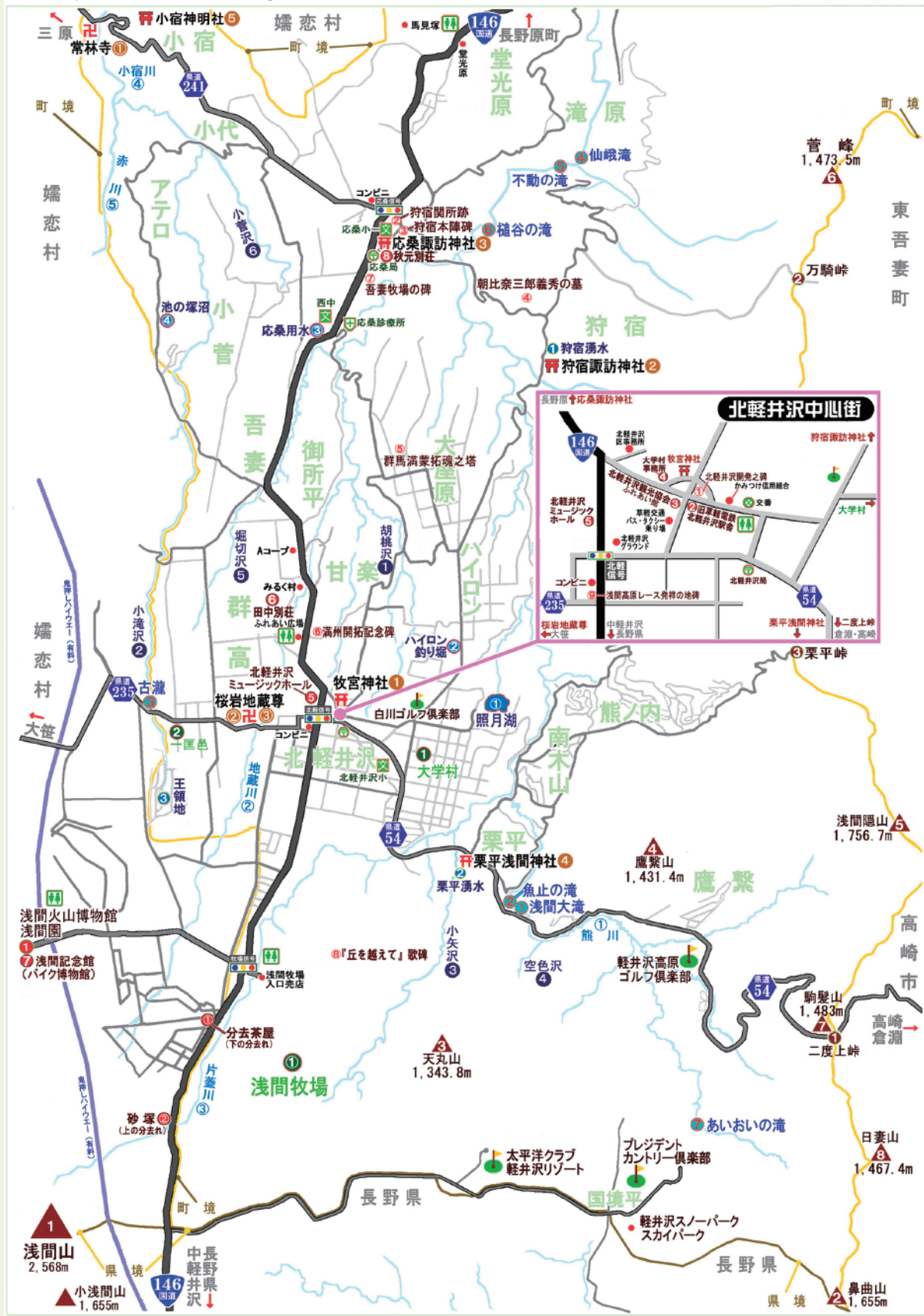
- K-仏閣
① 常林寺
② 桜岩地藏尊
③ 六里ヶ原
④ 追しるべ観音

- L-建物・記念館
① 浅間火山博物館
② 旧北軽井沢駅舎
③ 北軽井沢ふるさと館
④ 北軽井沢観光協会
⑤ 北軽井沢大学村事務所
⑥ 北軽井沢ミュージックホール

- ⑥ 田中別荘
⑦ 浅間記念館
⑧ 秋元別荘
⑤ 群馬満蒙開拓碑
⑥ 満州開拓記念碑
⑦ 吾妻牧場の碑
⑧ 「丘を越えて」歌碑
⑨ 浅間高原レース発祥の地碑

- M-碑・史跡
① 北軽井沢開発之碑
② 狩宿開所跡之碑
③ 旧狩宿本陣の碑
④ 朝比奈三郎義秀の碑

- N-その他
① 分去茶屋（下の分去）
② 砂塚（上の分去）

五感を澄ませて楽しもう
北軽井沢散策マップウォーキング
ポイント

- A=国道146号線の右側の歩道を歩きます。
B=ガードレールの切れたところを右に入ります。途中一部砂利道に。
C=「しらかば」の看板を左折します。
D=国道146号を横断します。必ず横断歩道を渡りましょう。
E=地蔵川の看板を左に進みます。
F=「みるく村」の矢印に従って進みます。
G=「JA工場の建物の角を左折します。
H=「フォレスト・アドベンチャー・アサマ」の門をくぐり進みます。
I=十字路を直進します。
J=堆肥舎を囲むガードレールが切れた、向かい側の砂利道を進みます。
K=県道235号線にでます。右に進むと桜岩地藏尊です。その先は「古瀧」へ続きます。
L=国道146号線に出ます。コンビニ前の駐車場を左に進みます。
M=北軽井沢の信号です。直進するとミュージックホールです。
N=北軽駐在所の矢印通り進みます。

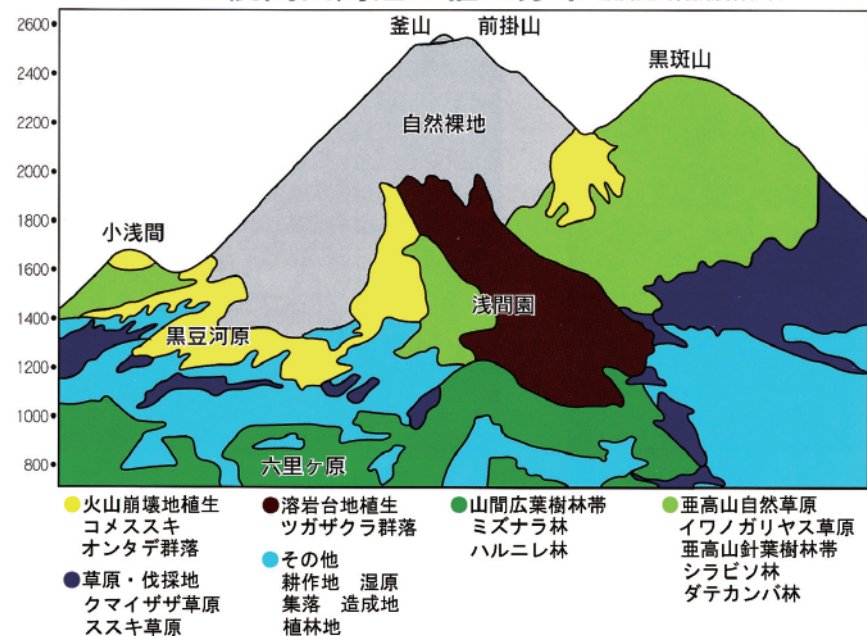
★ 駅舎から桜岩まで古の道を訪ねる
～北軽井沢の歴史を散策するコース～

● 距離数約5.2km ● 所要時間一約95分 (おおよの目安です)

- ① 旧草軽電鉄 北軽井沢駅舎=昭和35年まで走っていた草軽電鉄の現存する唯一の駅です。
② 北軽井沢大学村事務所=松室政政大学学長の発案により法政大学村は昭和2年開校しました。
③ 満州開拓記念碑=戦後の農業・酪農業の発展は満蒙からの引き揚げ者たちの努力の賜物。
④ 牧宮神社=北軽井沢地区を興した浅間牧場を開いた北白川宮能久親王を祭った神社。
⑤ みるく村=北軽井沢は群馬県内有数の酪農地帯。自慢のソフトクリームや牛乳をどうぞ。
⑥ ルオムの森 田中別荘=ルオムの森の中にある、浅間北麓で最古の洋館といわれる田中別荘。
⑦ 六里ヶ原遺跡=江戸時代後期に旅人の道しるべにと1丁ごとに観音様が置かれた。
⑧ 桜岩地藏尊=岩を割って生えている2本の桜にちなみ、桜岩地藏尊と言われる。
⑨ 浅間高原レース発祥の地=昭和30年日本で初めて本格的な2輪耐久レースが行われた。
⑩ 北軽井沢ミュージックホール=斎藤秀雄ゆかりの日本初の音楽学生のための研修施設。
⑪ 北軽井沢ふるさと館=草軽電鉄などの資料を展示してある。兼観光協会事務所。

景観ポイント

浅間山周辺の植生分布 (浅間火山博物館資料より)



泥流は、川をながれ、ふさぎ、吾妻川から利根川などを通り、銚子まで達したという記録も残っています。その泥流のすさまじさを物語るのが「常林寺の梵鐘」です。川沿いにあった常林寺は、鎌原火砕流・岩屑流によって寺ごと流され、その梵鐘が明治四五年の水害の時、十五キロ下流の吾妻川の河原で一二七

年ぶりに発見され、常林寺に戻りました。現在は、長野原町立浅間火山博物館に展示されています。鎌原村は、日本のポンベイとよくいわれますが、イタリヤのポンベイは火砕流によって地中に埋もれてしまいましたが、鎌原村は、村民の八割が失われてもお復興を果たし、現在までその歴史を伝えています。

破壊から再生へ！ 新しい生命を育む

す。

鬼押出しはどうでしょう。溶岩だらけの場所にも、実に多くの植物が見受けられます。北軽井沢、嬬恋は、江戸時代、明治時代には六里ヶ原と呼ばれ、焼け原と呼ばれていました。当時民家はほとんどなく、木陰になる木もなかったようです。もちろん目印となるようなものがなかったために、道に迷い遭難する人が多かったと伝えられています。そうした旅人の道しるべに、当時の分かれ茶屋の助四郎という人が、寄進を集めて建立したのが、六里ヶ原の道しるべ観音です。法政大学村が出来た昭和三年ごろも、大学の別荘の赤い屋根が、草津電鉄の車窓から見えたといわれています。今の林や森に囲まれた姿からは想像もつきません。もともと、火山灰の大地は地質が酸性となり、農業には向いていないといわれます。米や野菜などをつくるには、アルカリ性の土壌が適しています。酸性の土壌で生育する食物はあまりありません。黒豆の木といわれる「浅間ぶとう」などのベリ系植物は酸性の地に向いて

日本で最初の自然研究路を開設 浅間園 (長野原町営鬼押出し 浅間園 浅間火山博物館)

昭和38年に、上信越高原国立公園の中心部に、長野原町営鬼押出し浅間園、同42年に浅間火山博物館ができました。この施設は、日本で初めて自然研究路(遊歩道ネイチャートレール)を設けたもので、自然科学教室としての知識の向上と理解を深めてもらうことをめざしました。平成5年には、リニューアルオープンとして、博物館を新設し、展示内容にも最新の技術をいれ、浅間火山周辺の自然を理解してもらうようにしました。



火山博物館内の展示内容は、「地球マジカルホール」「ロストワールド」「地底探査船」「地学展示室」「気象観測コーナー」「自然展示室」などにわかれています。レストラン、ショップなども併設しています。また、隣接して浅間記念館(オートバイ博物館)もあります。火山博物館への入場料は大人600円、小・中学生は300円です(団体・特別割引有)。浅間記念館は、大人(高校生以上・団体割引有)300円、小・中学生は無料です。

一方、自然遊歩道は、無料です。鬼押出しの

努力で、不毛の地といわれた北軽井沢を、わずか二十数年で、群馬県内有数の農業、酪農地帯に変貌させた生きた実例が、身近にあります。破壊、再生された大地からは、また新しい未来が生み出されてくることを浅間は教えているのです。

火の山「浅間」 大地の恵みに生きる



「破壊」と「再生」が繰り返される地。高原の豊かな自然を培った火の山「浅間」の魅力を探ってみよう。

はるか昔から胎動を続けてきた浅間山。何度かの大噴火を経て、現在の姿になったといわれる。ひとたび噴火すれば、自然の圧倒的な力に人は慄くばかり。時が過ぎ、溶岩に覆われた大地からも新しい生命が誕生する。

日本で最も活発な 活動が続ける浅間山

群馬、長野の両県にまたがる浅間山は、世界有数の活火山といわれています。その大きさは東西約一五キロ、南北約三五キロの広がりを持ち、ほぼ円錐形の美しい姿を持っています。北軽井沢は、浅間山の北麓に位置します。場所によって、見える姿も大きく異なります。群馬県の北軽や嬬恋からは、その優美な姿が、観音様が寝ているようだといわれ「寝観音」(左図参照)とも呼ばれます。

現在の浅間山は、三重式の火山をもっています。まわりに輪のような形の山(外輪山)が二重にあり、中央に新しくできた火山(中央火口丘)があります。西側にある外輪山を黒斑山(くろふ)といいます。軽井沢の千ヶ滝上部や、峰の茶屋付近にはまた違う火山があります。こちらは仏岩火山といわれています。現在、盛んに活動している



火山は、黒斑火山と仏岩火山の上に新しく成長した火山です。「前掛火山」と呼ばれています。天明三年の大噴火を起こしたのは、この火山です。浅間山は日本最大の活火山の中でも、ひ



浅間火山博物館に展示されている常林寺の梵鐘

んばんに活動を繰り返す火山として有名です。大音響とともに爆発し、噴火口から黒煙を高く吹き上げます。天明以降の噴火はすべてこうした形の噴火だといわれています。

甚大な被害をもたらした 天明の大噴火

過去に何度も大噴火を起こしてきた浅間山ですが、近年最も甚大な被害をもたらしたのが江戸時代の「天明三年の大噴火」です。死者千数百名を出し、その噴火によって吹き上げられた灰などが関東一円に降り注ぎ、天明の大飢饉の一

因になったとも言われています。浅間山は、五月頃から活発な火山活動を続け、八月二日〜五日にかけて、大噴火を起こしました。この天明三年の大噴火は、浅間北麓に甚大な被害をもたらしました。鎌原火砕流は、八月五日に起きた火砕流で、途中で岩屑なだれに変化し、鎌原村を飲み込みました。鎌原村では約四六〇人がこのなだれの犠牲となり、生存者はわずか九三人だったと記録されています。

浅間山では、火砕流の後、灼熱した溶岩が流れ出て、長さ六キロ、幅二キロの特異な地形を持つ溶岩台地が出来上がりました。これが「鬼押出し」です。また流れ出た火山



浅間ミーティングクラブと
浅間記念館(二輪車博物館)

浅間高原レースの歴史を伝え、モーターサイクルの今日を語るために、日本で初めて開設されたのが浅間記念館(二輪車博物館)です。長野原町と浅間ミーティングクラブが協力して、1989年(平成元年)長野原町町営鬼押し浅間園内に開館しました。館内には、素晴らしいライダーとマシンを育てた原点である「浅間高原レース」、「浅間火山レース」ゆかりのバイクなどを展示した「ヒストリック展示」、消防署などの官公庁などで使用されたバイクなど暮らしを支えるバイクを展示した「パブリック展示」、そして毎年展示内容が変わる「企画展示」があります。また、当時のレースで使われた、スタート・ゴールの横断幕や、トロフィー類、雑誌などの資料展示も充実しています。入館料は大人300円、中学生以下は無料です。

★ 浅間ミーティングクラブとは

浅間ミーティングクラブでは、オートバイの社会的地位の向上と、アマチュアの手で展示館を作るために、1975年から10年間資金を積み立て展示館を完成しました。展示車両の提供や展示内容の更新などを行っています。同会の運営は、年1回の会費と、年2回のミーティングのエントリーフィーで維持されています。会員の任意のボランティアで運営されています。バイク好きな方の入会をお待ちしています。問い合わせは、下記ホームページまで、どうぞ。

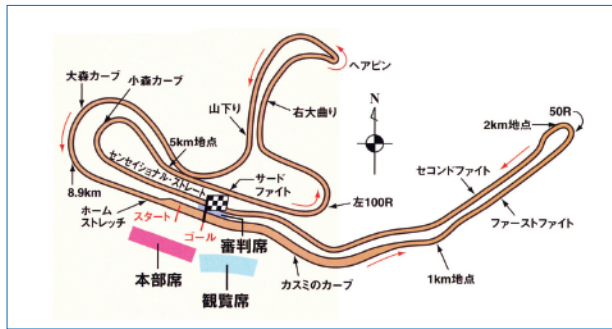
NPO法人:浅間ミーティングクラブ
http://www.asama1975.org

その理由は、コースの持ち主である浅間高原自動車テストコース協会が「レースのためにはコースを貸さない」という方針を打ち出したためでした。また自動車メーカーは技術力が高まり、国内ではなく、海

外のトップレースへの参加が増えたことや、コース内に舗装の部分がなく、高速を出せないなどの理由もありました。わずかに四年の間に、計五回の全日本クラスのレースが開催された浅間高原。現在、そのレース場は壊されましたが、航空写真などでそのコース跡をたどることができます。「浅間から世界GP」という言葉に象徴されるように、日本の二輪レース史において、浅間高原は特筆すべき場所であることは間違いありません。現在、上述の「浅間記念館」および、北軽井沢交差点隣接の「浅間高原レース発祥の地碑」(右写真)に、当時の思いを感じることが出来ます。

アマチュアライダーの クラブマンレース

こうしたバイクブームの中、純粋なアマチュアライダーたちによる第一回全日本モーターサイクルクラブマンレースが、一九五八年八月二四日台風で大荒れの中、浅間高原自動車テストコースで行われ



本格的なヘアピンカーブをもつ浅間高原自動車テストコース

の呼びかけで、アマチュアライダー(クラブマン)の団体、全日本モーターサイクルクラブ連盟(MCFAJ)が創設され、このMCFAJが主催で、第一回全日本モーターサイクルクラブマンレースが開催されました。初めてのアマチュアライダーのレースということもあり、市販のマシンではなく、メーカーが造ったマシンではないかという車種もあったようで、こうした疑いをもたれた車両だけを集め「クラブマン模範レース」も開催しました。

一九五九年には第三回全日本オートバイ耐久レース(第三回浅間火山レースと、第二回全日本クラブマンレース)が共催で、八月二二日から二四日まで、三日間浅間高原自動車テストコースで開かれました。この時の観客数は七〇〇〇人を超えたといわれています。



2006年、スタート地点に建立された
第1回浅間高原レース記念碑

今でこそ世界のトップをひた走る日本のモーターサイクル。その原点がこの北軽井沢にありました。1955年国産メーカーの技術向上をめざし、輸出振興をはかるために、この地で第1回全日本オートバイ耐久レースが開催されました。

北軽井沢が燃えた 2輪耐久 「浅間高原レース」



日本の二輪レース 発祥は北軽井沢

日本のモーターサイクルレースは、浅間高原から始まりました。一九五五年(昭和三十一年)、北軽井沢を中心にした浅間高原で、日本初の本格的な二輪ロードレース『浅間高原レース』が行われました。

日本の主要産業は戦前の軽工業から、戦後の重工業への移行する時期にあたり、なかでもモ



ーターサイクルにかける期待は高く、国産のモーター開発が急がれていました。当時は、日本全国に200社以上のオートバイメーカーが乱立していました。性能的には輸入品と比較すると、三〇年の差があるといわれていました。こうした状況の中、国産メーカーのレベルアップを図ろうと、耐久レースが企画されました。当時の日本小型自動車工業会が候補地として選んだのが、この浅間高原です。「第一回浅間高原レース」を皮切りに、五年間にわたり計五回(同時開催を含む)日本のモーターサイクルの歴史を作ったレースが開催されました。第一回は、一九五五年十一月五日〜六日、国道一四六

浅間高原レース3つのQ&A

Q1. 第1回浅間高原レースはどうして公道で開催できたの?

A1. 妙義山の柴垣はるさんと、軽井沢の星野温泉、星野嘉助さん(3代目)が尽力したからです。柴垣さんは妙義山の持ち主で、星野さんに妙義山の処分について相談を持ちかけました。星野さんは「売って処分をするよりは県に寄付したほうが良い」とアドバイスしました。これを受けて、柴垣さんは昭和29年に星野さんを通じ、県に妙義山を寄付しました。小型自動車工業会から、オートレース開催の協力要請を受けた、星野さんが群馬県に働きかけ、実現したものです。

Q2. 第1回浅間高原レースが行われたには何日?

A2. 第1回浅間高原レースは、当初10月26日〜27日の両日、群馬県・長野県にまたがる1周約40kmのコースで開催される予定でした。しかし、公道を使つてのレースということで、長野県側の許可がどうしても下りず、群馬県内だけの開催となり、コースも北軽井沢を中心に1周19.2kmに変更されました。また、開催日も警備の都合上、10月から11月5日〜6日へと変更されました。当時の大会資料などには、当初の日程が記載されているものもあり、混乱を招いているようです。

Q3. 第1回浅間高原レースは順位だけでタイムの発表がなかったのはなぜ?

A3. 公道を使うレースを許可するための条件の一つに、タイムを公表しないことが上げられていました。そのため主催者は、タイム公表について慎重になり、その後も一切発表されませんでした。

号や町道を封鎖して、一周約一九・二kmのコースで行われました。公道を使用したレースということで、タイム・速度は非公開、順位のみ発表というものでした。これが「第一回全日本オートバイ耐久レース」(正式名称)、「第一回浅間高原レース」と一般に呼ばれるものです。

専用の自動車 テストコースを設置

一回終了後、自前で専用の自動車テストコースを建設しました。浅間牧場の一部と嬬恋村の所有地を借り受け、一周九・三五一kmの日本初の本格的自動車専用サーキット『浅間高原自動車テストコース』を建設しました。

専用コースの完成を記念して一九五七年一〇月十九日〜二〇日に、第2回浅間火山レースが行われました。コースの路面は舗装なし、全面ダートで、砂利道(火山灰)を固めたものでした。この時に集まった観客は、六五〇〇人とい

北軽で考える

【農】【食】【住】の

未来

北軽井沢での一年間、「じねんびと」のホームページにいろいろな情報をアップしました。
 ここではホームページに掲載した内容などをまとめて、最近の北軽のいろいろな動きから、未来へつながる道を探してみたいと思います。

北軽井沢
コンソーシアム協議会

北軽井沢コンソーシアム協議会は産（北軽井沢各種団体）と官（群馬県・長野県）として学（群馬大学）が連携、協働（コンソーシアム）して、北軽井沢地域が抱える様々な課題の解決や地域活性化を図ることをめざして活動した団体です。二年間の定められた期間の中で、公開講座を開催し、地域五カ所に「ようこそ」サイン看板（写真参照）を設置しました。ま



た、旧草軽電鉄北軽井沢駅舎隣に、草軽電鉄を象徴する電気機関車『デキ一二形』通称カブトムシの実物大の木製模型を製作・設置し、北軽井沢の活性化を図りました。情報発信では、地域情報誌『きたかる』を発行、ホームページ「じねんびと」を立ち上げ、随時更新をしています。また、住民の、住民によるフェスタとして、第一回「わくわくフェスタ」を開催し、多くの来場者を集めました。将来「きたかるいさわ」の名をつけた商品・特産品のブランドマークとしての活用を願い、ロゴマークの商標登録を行いました。

北軽の新たな「食」・特産品つくりをめざす
 地産地消と言われるなか、牛乳、高原野菜など、県内でも有数の生産地である北軽で、特産となる商品や「食べ物」を開発しようという動きが始まっています。昨年の「わくわくフェスタ」のなかで「北軽グルメレシビコンテスト」の部を開催し、町内から十三の団



体・個人の参加があり、地元の食材を使った、新たな食の提案がありました（左P）発表風景）。さらに、このイベントに参加したチームに「群馬の物語弁当コンテスト」への参加を呼びかけ、北軽井沢地区から四品が出品し、そのうちの一品は、十二点の優秀作品の一つに選ばれました。こうした作品をどうしたら商品化・特産品につなげていけるのが、今後の課題です。

また、ホームページ「じねんびと」では、北軽井沢のいろいろな資源の掘り起こしを行いました。自然・景観などの環境資源、浅間牧場・草軽電鉄・北軽井沢ミュージックホール等歴史的資産（参考）北軽井沢散策マップ）、そして高原野菜・牛乳などの農作物の資源。こうした資源を資産に換え、地域の特徴を生かした特産品を考えていくことが求め



られています。

農と異業種との
連携をどう図るか

北軽井沢の「農業」への取り組みとして「直売店」の特集をホームページにまとめました。国道一四六号線沿いに、十六軒もの直売店があります。扱っている品は、主に地元の農作物です。個人経営のものから、企業が経営するもの、会員制農家で運営しているものなど

があります。近年の健康志向を受け、無農薬・減農薬の作物が多く並びます。しかし、それぞれ単独の経営なので、「虫が付いていた」などのクレームが多いことも事実です。もちろん、消費者の方が、直売場で売られている朝取りの完熟した品を、スーパーなどで販売している商品と同じように受け止め、購入したために起きたトラブルも多いようです。

能登半島の朝市や、直売所とレストランが一体となったもの、花だけ売る直売所など、個性的な店舗が少ないようです。北軽井沢スタイルとでもいうようなある種の基準をもうけて、「北軽井沢の直売所」というブランドを作っていくことも必要でしょう。

地域の特徴を生かした生活様式の提案を
 昨年末、ルオムの森で、フィンランドの生活展が行われました。北欧の中でもフィンランドは、北軽井沢との共通点が多いと言われる国です。フィンランドの生活様式の中にいくつか学べるものがありました。一つは、室（ムロ）のある生活です。昔は私たちの家にも夏は通風がよく、冬は暖かいので、ムロのある家が多く、野菜



います。北軽井沢コンソーシアム協議会は、所定の二年間を終え、二三年の三月に解散しましたが、住民中心の新しい組織「北軽井沢じねんびと」に引き継がれました。「北軽井沢じねんびと」では、「第二回わくわくフェスタ」の開催、ホームページ「じねんびと」の更新、地域活性化につながる活動をするグループ●サイエンス検討グループ●情報発信グループ●わくわくフェスタ実行委員会●ミュージックホールサポーターズ●花のゆりかごプロジェクト●食に関するグループ●自然研究グループ●ノルディックウォーキンググループ●歴史研究グループなどを発足させ、活動を行っています。どなたでも参加することができますので、興味をお持ちの方は、ホームページ「じねんびと」の問い合わせフォームまでどうぞ。

訃報

平成二年秋から三年春にかけて北軽井沢にゆかりのある方が続々と亡くなりました。二年十一月五日に佐野洋子さん（作家）代表作『100万回生きたねこ』が乳がんで亡くなりました。北軽井沢に仕事場をもち、年間を通して精力的な執筆活動を続けていた作品『エッセイ』ももありました。ご冥福をお祈りします。

日本の映画全盛期を支えた女優、高峰秀子さんは、二年十二月二十八日に八十六歳で肺がんのため、亡くなりました。日本映画初のカラー作品『カルメン故郷に帰る』（木下恵



介監督）下写真・提供：御宿地蔵川で、主演女優を演じられた。その際、約三カ月間、北軽井沢で映画撮影が続けられました。映画監督、松山善三さんと結婚をされた後は、女優の仕事が減り、エッセイストとしても活躍されました。映画『カルメン故郷に帰る』について、「私の長い俳優生活上のひとつのヤマ場になったけれど、個人的な意

味でも、私の人生のヤマ場のひとつでもあった（高峰秀子著）わたしの渡世日記」と書いています。ご冥福をお祈りします。詩人、童話作家、北軽井沢を誰よりも愛された岸田裕子さんは、二年四月七日、髄膜腫のため八十二歳で亡くなりました。劇作家、岸田国士さんの長女、女優岸田今日子さんの姉。少女時代が弱かった裕子さんは、北軽井沢の別荘で療養をしました。北軽井沢を愛し、年間北軽井沢で生活され、精力的に執筆活動をされました。代表作には『かばくん』（童話）『ソナチネの木』（詩集）、アルプスの少女ハイジの主題歌『おしえて』の作詞など、多くの作品を残されました。また北軽井沢に関する作品も多く残されました。ご冥福をお祈りします。

など必要な分だけそこから取り出す生活をしていました。また、涼しい山中では夏場まで氷を保管する水室などを設けていました。信越線が通っていた北軽井沢には明治、大正、昭和にかけて多くの水室があり、東京へ出荷する製氷業は、大きな産業の一つでした。こうした自然を生かすムロの仕組みを北軽井沢の生活に取り入れることができないか、検討が始まっています。

もうひとつ、フィンランドといえば、ノルディック・ウォーキングの発祥の地です。両手にストックをもって歩くのですが、日本国内でも大注目のスポーツです。運動効果が高く、リハビリから強化トレーニングまで、応用範囲が広く、また子どもから高齢者まで年齢を問わず、楽しめることも魅力のひとつです。すでに、観光協会や北軽井沢の幾つかの企業もノルディック・ウォーキングに関心を寄せ、指導者の育成や大会開催などの計画も進行して

春夏秋冬の北軽井沢

モミジやカエデだけで終わらない紅葉の秋。

見渡す限りの銀世界で、子どもも大人も興じる雪合戦の冬。
標高1,000m、都会では味わえない四季がここには満ちています。

(10月～12月)*この時期の平均気温約4℃

9月の半ばを過ぎると、北軽井沢に秋の気配が訪れます。次第に昼間と夜間の温暖の差が大きくなり、ツタやモミジ、ウルシなどが鮮やかな紅葉を見せるようになります。紅葉から落葉へ、そして裸の木々が多くなると、霜が降りる季節となります。北軽井沢の人々が冬支度を始める頃、山の動物たちの冬ごもりも始まり、浅間山の初冠雪が冬の始まりを告げます。白い静寂がすべてを包み込みます。

しんと冷えて込む北軽井沢。この時期夜はマイナス10℃以下になることも、少なくありません。一面に広がる銀世界には、キツネや野ウサギなどの足跡を見かけることも。天気の良い日はウィンタースポーツを楽しみましょう。スキー、スノーボードや雪合戦、最近ではスノーシュー(雪上のウォーキング)も注目集めています。1月から2月には「雪合戦大会」「炎のまつり」なども予定されています。

(1月～3月)*この時期の平均気温約-3℃

秋
冬

アクセス&周遊マップ

四季折々、季節によっていろいろな情景を映し出す北軽井沢。

作家、野上弥生子さんが一目惚れした花盛りの春。

高原の花火と冷気がすがすがしい夏。

(4月～6月)*この時期の平均気温約10℃

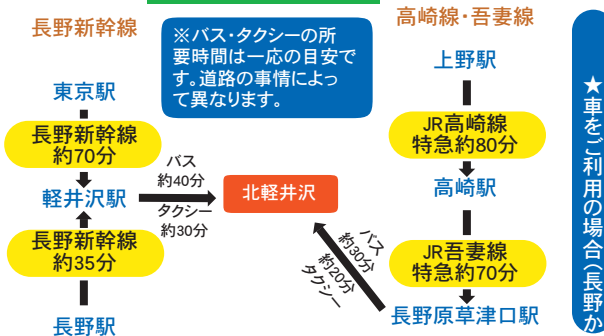
雪解けが始まり浅間山に『さかさ馬』が現れると、北軽井沢に春が訪れます。桜、コブシ、スミレ、リンドウなどがいっせいに咲き乱れ、華やかな色彩が浅間高原を彩ります。かつて浅間高原の一部は「つつじヶ原」と呼ばれるほど、つつじが群生していました。5月になると浅間牧場などで、満開のつつじが楽しめます。新緑の柔らかなグリーンと、花々の鮮やかな色彩が、この季節の何よりの贈り物です。

標高が高い北軽井沢では、夏でもクーラーいらずで過ごせます。湿気が少ないのも快適さの理由の一つ。ゴルフ、テニス、乗馬、釣り、ウォーキング、アスレチックなどに、また大正時代から林間学校があったほど、勉強にも適しています。毎年旧盆(8月14日)には、北軽井沢高原まつりが開催され、盆踊りや花火大会が行われます。北軽井沢ミュージックホールでのコンサートも夏の風物詩の一つです。

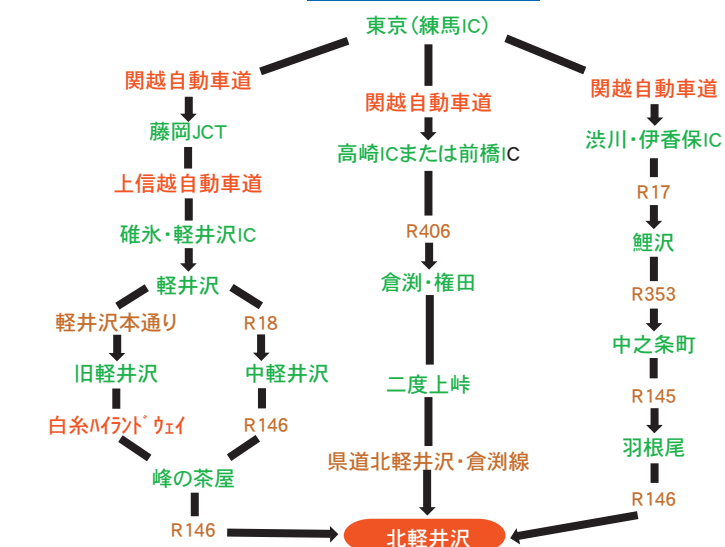
(7月～9月)*この時期の平均気温約18℃

● 交通のご案内 ●

★電車をご利用の場合



★車をご利用の場合



編集後記

今回、きたかる2号の編集を担当しました佐藤といいます。なかなか原稿や編集作業が順調に進まず、かなり遅れた発行になったことをお詫びします。

改めて、北軽井沢取材してみると、まだまだ可能性を秘めている地域であることに驚きます。

新しく「北軽井沢じねびと」の体制がスタートしました。地域活性化への尽力を期待します。最後に、本文中の写真をご協力いただきました各位と、快く取材に応じていただきました方々に、深く感謝をいたします。また機会がありましたら、ホームページでお会いしましょう。

写真協力

黒岩 謙さん
園田 正雄さん
山根 清一さん
長野原町
北軽井沢観光協会
ほか

